

地域博物館の新たな意味を探る —博物館資料を活用した回想法を通じて—

森と木のクリエイター科 木工専攻 下山 みなみ

1. 背景

1. 1. 歴史系博物館の抱える課題

日本に現存する博物館のうち 55%は歴史系博物館に分類される。博物館業界全体では、外国人対応や ICT 導入などのデジタル化が課題として挙げられている。しかし、歴史系博物館では設備施設の老朽化、調査研究や資料整理、資料（民具）の活用が進まない、財源不足、職員不足といった経営的課題が長期にわたって解決されていないという現状がある。

このような課題は小規模館ほど深刻であり、博物館はそれまでの役割にとどまらない新しい意義を求められている。

1. 2. 地域回想法の先行事例

回想法は、1960 年代にアメリカで提唱された高齢者の認知症ケアのための医学療法から始まった。高齢者が昔懐かしい道具や写真に触れ、過去を回想することで高齢者の認知機能の回復、介護者である職員や家族が高齢者の新しい側面を再発見して関係性を改善するなどの効果が期待されている。

日本では 1990 年代以降に福祉の現場で取り上げられるようになったが、それまでの医学療法とは異なる変化を遂げた。北名古屋市が初めて地域づくりとしての回想法を行い、昭和の日常博物館の資料を活用した「地域回想法」が提唱された。これは医学療法としての回想法とは異なり、こちらは博物館の資料活用を目的として始まった。現在では回想法センターという回想法のための拠点ができただけにより、地域づくりや高齢者の生きがいづくりを目的としたワークが実施されている。

現在では博物館資料を用いた回想法が多く行われており、飛騨市で行われている民具貸し出しのように少しずつ広がりを見せている。

2. 研究目的

博物館の民具資料を活用した回想法ワークを福祉の場でを行い、参加者のコミュニケーションを分析する。あわせて関連した人物や組織の連携といった波及効果から博物館の新しい役割を見出す。

3. 研究方法

1. 文献調査
2. 回想法実施計画の立案
 - 3-1. 実施準備①資料の選定
 - 3-2. 実施準備②対象者理解
 - 3-3. 実施準備③回想法体験

4. 回想法ワークの分析
5. 波及効果のヒアリング調査
6. 博物館の新しい役割への考察

4. 実施準備

郡上市明宝に位置する明宝歴史民俗資料館を対象館に設定し、同地区の明宝デイサービスセンターの通所者 5 名を対象に回想法を行った。回想ワークは 2021 年 12 月 9 日、16 日、23 日に 1 時間第 1 回：山仕事、第 2 回：昔の遊び、第 3 回：食事の道具をテーマに設計した。



4. 1. 資料の選定

第 1 回目の話題となる山仕事への理解を深めるため、アカデミーの工房にて背板を制作した。背板を用いて明宝の山中で薪木を運搬する体験を行った。その様子を、明宝コミュニティセンターと明宝デイサービスセンターで分散展示¹し、資料への理解を深めた。また、2 回目以降の回想法の資料に関しては、資料館スタッフと相談し、資料を決定した。

4. 2. 対象者の理解

回想法の対象者が通所する明宝デイサービスセンターの見学を行った。展示がセンター入り口に設置してあったために、複数の通所者が展示を見ていた。また、通所者の一人に山仕事経験者がいたため、話を聞くことができた。送迎の際にはコモという山村民具をツールにして通所者と会話をするのができ、デイサービスで回想法を行うことに対しての手ごたえを得ることができた。

4. 3. 回想法の体験

北名古屋市回想法センターにて回想法の見学、体験を行った。北名古屋モデルでは、①発話を強要しない②他の参加者の話を否定しない③ワークで出た個人情報を外で話さないという 3 つの約束があることを確認した²。回想法センターでは、リーダーとコ・リーダー（補佐役）が中心となって回想法を進めており、高

¹ 明宝歴史民俗資料館で行われている、博物館外に資料を展示する活動のこと

² 今回は参加者に研究データの提供を依頼し、データの一部公開の許可を得た。

齢者にとっても気軽に話に行ける場所となっていた。

5. 結果と分析

5. 1. 回想法ワークの質的分析

回想法ワークの参加者は、デイケア側と相談して決定した。Aさん（93歳男性）とBさん（86歳男性）は山林の民具を使用した経験があり、Cさん（86歳女性）は弁当や味噌醤油への関心が高く、Dさん（94歳）は家族・兄妹の思い出が強い。またEさん（94歳女性）は実家の家業から炭焼きや馬方の記憶が色濃く残っている。



発話では、男性は自身が経験した仕事を語る事が多く、女性は料理や家族の思い出が話題として出ることが多かった。食べ物と遊びは男女共通で会話が弾む話題であり、話が進むにつれて方言や笑い声が多く見られた。序盤から話数が多かったDさんは、話の中心にいること多かったが、時間経過とともに全員がそれぞれの独自の回想に耳を傾けるようになり、誰かが一方的に話す場面は減少していった。

また発話以外では、回を増すごとに資料に触れて昔に思いを馳せる、当時の様子を再現するといった直接民具に触れるという行動が増加した。

会話の話題は、回を増すごとに多くなり、はじめは会話に参加していなかった参加者も最後には会話の中に入って回想をする様子が見受けられた。

図表2：回想法の質的分析の例（3回目）

話題	キーワード	時間	発話数	人数	注目点
1	弁当箱、割り子	7:52	72	5人	最初から資料館スタッフ参入
2	朝鮮釜飯	3:52	32	4人	男性陣の発言多め
3	圍炉裏、香木...	4:58	68	5人	パネルをもとに考える時間
4	ウムシ（煮干し）	7:52	126	5人	食べ物の共通認識がある
5	鉄鍋、カス玉...	3:39	48	5人	女性同士で主張がぶつかる
6	イナゴ、わりがき	4:52	65	4人	上記の緊張性が緩和
7	味噌汁、醤油、塩	6:10	109	5人	資料を使って使用状況を再確認
8	イタドリ、アケビ	1:55	20	5人	植物名がポンポン飛び出す
9	回虫、虱、葉...	7:35	121	5人	一番の盛り上がりを見せる
10	とちくねり、栃餅	3:35	55	5人	採集やあく抜きを思い出す
11	箱膳、食器洗い	3:46	54	5人	それぞれが自由に喋る
12	（ふりかえり）	6:11	51	5人	終わりにくい様子が見えた

5. 2. 回想法ワークの量的分析

全体的に回数を重ねるとともに、発話回数は増加する傾向がみられた。中でもBさんは3回目での発話量が一気に増えて、自身の思い出を生き生きと語る姿が見られるようになった。

資料館スタッフ（表の「資料館」）は、当初は質問をする進行側の立場だったが、最終的に自身も回想の輪に入って参加者のようにふるまっていたため、話数が増加している。

	第1回	第2回	第3回	合計
Aさん	80	116	126	206
Bさん	18	15	58	76
Cさん	79	157	172	251
Dさん	178	300	351	529
Eさん	68	142	97	165
資料館	55	97	131	186
合計	478	730	935	1413

※一区切りの会話を1回として算出

6. 考察

資料館側も回想法に前向きな姿勢を見せていた。デイサービスセンターと資料館が協力し、回想法ワークを実施したことにより、連携の可能性が見えた。また、かねてから回想法の導入に興味を持って、独自の回想法サロンを開催していた郡上市の社会福祉協議会と資料館の間にも協力関係が生まれようとしている。

豊富な資料とノウハウを持ち合わせている資料館スタッフは、今回の回想法ワークにおける重要な存在であった。民具に時代背景や使用方法を熟知している資料館スタッフの協力のもと、参加者に寄り添った資料選択をすることができた。

参加者が民具資料に触る際に、ごく自然にその道具を使用していた際の動作が再現されていた。リアリティのある民具資料でかつて行っていた動作を追体験することで、参加者は言語にとどまらない参加者の記憶を呼び起こすことができたのかもしれない。

今回の回想法ワークでは「面白かったというよりも懐かしかった」という感想が上がった。民具と触れ合うことで過去を回想し、仲間と思い出を共有する喜びを感じる。また、参加者それぞれの記憶の違いを認識し、多様な人生のあり方を確認していく中で、自己を肯定し、参加者自身が生き生きと回想を楽しんでいる様子が見ええた。地方の高齢化が急激に進む現代において、民具を活用した回想法は、高齢者QOLの向上にも貢献ができるだろう。

また、回想法の実践は、さまざまな課題を抱えている地域の歴史系資料館にとって、とりわけ小規模館における資料活用ができていないという課題解決にも寄与できる可能性を秘めている。